

# 私見 Saturday 創見

富士山は日本一高い山であるだけでなく、独立峰なので、山頂は下層の人間活動による大気汚染の影響を直接受けることが少ない。富士山測候所は風速100分に耐えら

れるように設計されており、商用電源もある。2004年に無人化されたが、富士山頂での観測を必要と感じた大気化学・物理学の研究者は、天候の所内への運搬は、利用者、高所医学らの研究者と

## NPOへの支援に感謝

一緒に、富士山高所科学研究会を結成した。そして、05年にNPO法人「富士山測候所」を活用する会に移行し、気象庁から測候所を借用して、07年夏、富士山頂での観測を開始した。

測候所の運用は次のように行われる。気象庁時代から勤務していたプロの登山家などを山頂班として数人雇っている。山頂班は開所前に麓の太郎坊(5合目付近)から送電線の調査を行い、山頂まで上り、測候所が雪に埋まっていれば支障がない程度に除雪作業を行う。開所の準備ができたら、まず共同の器材を設置し、その後、各研究者が自分の器材を設置する。数トンを越える器材、生活用品などは、ブルドーザーにより測候所のすぐ下まで運ばれる。

### 旧富士山測候所を活用



みうら・かずひこ  
1955年、八戸市生まれ。2014年から現職。日本エアロゾル学会副会長、NPO法人富士山測候所を活用する会事務局長。東京都在住。

三浦 和彦 東京理科大学教授

利用者は設置作業を行い、泊まり込みで観測するグループもいれば、自動運転した後下山し、定期的に点検のため登山するグループもいる。そして、8月の終わりに撤収作業が行われ、通電をやめ開所

となる。この間、山頂班は常時3人体制で山頂を管理する。今年(2019年)の観測は7月8日から8月28日までの52日間行われたが、延べ利用者数は過去最多となる530人となった。

越境大気汚染、地球温暖化、雲生成、宇宙線、大気電気、高所医学など12件の研究プロジェクト、科学講座、携帯電話の通信向上、科学教材開発など4件の活用プロジェクトの他に、6件のトライアルプロジェクトが行われた。また、今年(2019年)は新たに学生が提案するプロジェクトも実施。さらに、二酸化炭素、宇宙線の観測はバッテリーと太陽光パネルにより通年で行われている。

この9年間、すべてが順調だったわけではない。開所前の点検で送電線が切断していることが分かり、修理のため時間と多大な費用がかかったこともあった。天候により登山

の補助などいろいろなことでお世話になっている。事務局は利用者の公募、各都府への届け出、利用者・山頂班・ブルドーザー運輸会社との調整、各種会議の開催、助成金申請書類、報告書の作成補助と年中暇なしである。

意外と思われかもしれませんが、NPOは公的な補助金は一切受けておらず、活動資金は専ら民間助成金と自主事業収入、そして会員の皆さまからの会費と寄付で賄ってきた。青森県の賛助会員数は実に250を占め、東京都と肩を並べている。この場をお借りしてお礼申し上げたい。

今年(2019年)は8月の終わりに旧富士山測候所でNHKの人気番組「プラタモリ」の撮影も行われた(10月放映予定)。これを機会に当NPOの活動を理解していただき、支援者が増えることを切望している。